

学者犬の語りにみられる複数の認識レベル — フランツ・カフカ『ある犬の研究』 —

山下大輔

はじめに

フランツ・カフカの『ある犬の研究 (Forschungen eines Hundes)』¹ は1922年の7月ごろに成立したとされている。² もっとも、この物語の命名と出版はカフカ自身によるものではなく、彼の死後に友人であったマックス・ブロートによりおこなわれた。この物語は、主人公であり物語の語り手である一匹の犬「私」が自身のこれまでの半生、研究生活について語り聞かせるという自伝形式になっている。彼は、自身の種「犬族」について独自の研究をおこなってきた学者犬である。物語の中で彼は、「7匹の音楽犬」、「空気犬」、「獵師」といった犬たちについて語り、また同時に犬族の「掟」、「忘却」、「沈黙」、「食料」について考察する。しかしながら、彼の学問はいずれも道半ばに中断され、遂には成果をあげることはない。

『ある犬の研究』の具体的な分析に入るまえに、まず1919年に書かれた断片を一つとりあげたい。カフカが残した日記や手紙、断片の中には犬について述べたものが散見されるが、この文章は『ある犬の研究』について考えるうえで示唆的である。ここでは、自らを子犬に重ね合わせる人物が描き出されている。

彼は、自分がどこかへ連れ去られてしまうような気がする。まるで自分が臆病な子犬のように思えるのだ。[...] 彼を興奮させるのは騒音ではない。もし彼がこの騒音を聞き、この音の構成要素を聞き分けることができたなら、彼はすぐさまその騒音を聞きたがるだろう。しかし、その騒音は彼には聞こえない。騒音のただ中を綱で引かれて行きながら、彼には何も聞こえていないのだ。(N 225)

この子犬には、自分を取り囲んでいる騒音を聞き取ることができないらしい。周囲の環境を把

¹ Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Hrsg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt am Main 1992. 以下同書からの引用はNと頁数を記す。

² Vgl. Alt, Peter-André: *FRANZ KAFKA. Der ewige Sohn. Eine Biographie*. München 2005, S. 645; Binder, Hartmut: *Kafka-Kommentar zu sämtlichen Erzählungen*. München 1975, S. 261.

握できず、それゆえ困惑する犬の姿がここで提示されているのだが、これは『ある犬の研究』の学者犬に共通する。後述するように、学者犬の知覚世界においては人間という存在が欠落している。彼には人間を見ることができないのだ。この物語では、上の断片で描かれている「聞こえない」状況が「見えない」という問題に変形されているのだが、いずれの場合も外界の刺激を十全に知覚できない事態が扱われている。この知覚の問題は、『ある犬の研究』の重要な要素といえる。先行研究も、学者犬の学問に対する挫折の原因を彼の知覚能力の限界性に求めてきた。これについては次章で述べる。ところで、この物語について論じる際に看過してはならないもう一つの特徴は、学者犬の反省行為である。この点に関して、ハートムート・ビンダーは、物語成立の起源を明らかにしたうえで、逆の趣旨の見解を示している。まず彼は、『ある犬の研究』が犬によって語られる人生譚、という枠組みをセルバンテスの『犬の会話 (El coloquio de los perros)』、E.T.A.ホフマンの『犬のベルガンツァの最近の運命に関する報告 (Nachricht von den neuesten Schicksalen des Hundes Berganza)』³ (1814) から継承していると述べている。そのうえで、この二つの先行作品と『ある犬の研究』の違いが、後者においては「物語全体を通して犬の内的反省については僅かにしか表現されていない」⁴ ことだと結論する。ビンダーによるこの指摘は再検討を要する。『ある犬の研究』においては、むしろ反省行為が物語全体を通しての問題意識といえるのだ。そもそも自伝という形式自体が内面への沈潜を前提としている。この物語の執筆時、カフカは内省的であった。『ある犬の研究』の成立と同時期、1922年7月に彼がマックス・ブロート宛に書き送った手紙はそのことをよく示している。ペーター・アンドレ・アルトは、その内容について「これまで彼〔カフカ〕は、自身の創作について、このときほど簡易明確に、そして記憶に焼きつけるようなイメージで言い表したことはなかった」⁵ とまで評価しており、カフカの創作を理解するうえで重要なものであることを強調している。この手紙からは、カフカが自身のこれまで創作行為について総括的、根本的に思索していたことがうかがえる。⁶ 当時彼は回復の見込めない病状ゆえに労働者保険協会からの退職を余儀なくされ、またその際の退職金の額は急激なインフレのために想定していたよりはるかに少なかった。このときカフカは身体的、経済的の両面において危機的な状況にあったといえるが、ただ

³ Hoffmann, E.T.A.: Nachricht von den neuesten Schicksalen des Hundes Berganza. In: *Fantasiestücke in Callot's Manier. Werke 1814*. Frankfurt am Main 2006, 以下同書からの引用はBと頁数を記す。

⁴ Binder, S. 262.

⁵ このマックス・ブロート宛の手紙の中でカフカは、自身にとって書くという行為、ならびに作家であるということがもつ意味について書き記している。そこでカフカは、書くという行為が自身の人生にとって必要不可欠なものであると述べており、またそのうえで書く行為が「忌まわしき仕事のための報酬 (der Lohn für Teufelsdienst)」であると述べている。ここでの「忌まわしき」が意味するものは、カフカによれば「虚栄心 (Eitelkeit)」、そして作家の条件である「自己忘却 (Selbstvergessenheit)」の中で享受される「享楽欲 (Genußsucht)」であると定義される。An Max Brod. (5. 7. 1922). In: *Gesammelte Werke*. Hrsg. v. Max Brod. Frankfurt am Main 1966, S. 382-387, hier 384f.

⁶ Vgl. Alt, S. 625.

し彼の日記を検討すると、そこからは別の面も読み取ることができる。この時期はまた彼にとって、安らぎを享受することができた稀な期間でもあったのである。彼は1922年7月に妹オットラの元に滞在していたのだが、翌月の日記でそのときのことを回想し、それがおおむね「好ましい時間 (gute Zeit)」⁷であったと書き記している。身辺状況に鑑みれば、カフカはこのころ退職、そして深刻な病状による精神的不安に悩まされていたが、そこには同時にオットラの元での滞在が可能にした精神的安定も並存していた。このような、不安と平穏が並存する状況が、カフカをブロート宛の手紙にみられるような創作活動についての根本的省察へと促したとも考えられるだろう。それゆえ『ある犬の研究』は自伝という形式を与えられたのであり、またこの物語の特徴である、学者犬の内省的な性格が誕生したのだとも推察することができる。

本稿では、まずこの物語について知覚という観点から検討し、そのうえで学者犬がおこなう内省的な思考、および彼の学問の性質についても考えてみたい。⁸ 先どりしていえば、彼の学問の挫折は、知覚と思考のレベルの断絶に起因している。この学者犬の学問を規定しているのは、制限された知覚と、それについて自覚的であるというメタレベルの思考が可能にする認識論的な視座にほかならないのだ。そして、この文学と認識論の交差点で私たちが向き合うのは『ある犬の研究』と共鳴するかのよう、現象学的な認識論や学問論などの言説である。

そのためにまず『ある犬の研究』を当時の動物言説や動物物語と比較し、この物語が動物の世界像という観点において独特なアプローチをおこなっていることを明らかにする。

1. 動物の世界像 生物学的な動物言説と動物物語

学者犬が研究の道を志すきっかけとなり、また同時に研究の大きな障害ともなるのが彼の知覚能力の限定性である。物語の序盤では、まだ幼犬であった彼が7匹の音楽犬たちと遭遇したときの出来事が回想される。音楽犬たちの振る舞いは、当時まだ平均的な犬の生活を送っていた彼の目にはあまりにも犬の常識を外れたものに映り、そのため彼はこの出会いにひどく困惑する。「七匹の偉大な音楽家たち」の登場を学者犬が回想する際、その情景は必然的に彼の知覚

⁷ Kafka, Franz: *Tagebücher. Bd. 3: 1914-1923*. Frankfurt am Main 2008, S. 235.

⁸ この物語は、本稿がとる認識論的な観点以外にもさまざまな角度から分析することが可能である。たとえばユダヤ的観点によると『あるアカデミーへの報告 (Ein Bericht für eine Akademie)』や『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族 (Josefine, die Sängerin oder das Volk der Mäuse)』などのカフカ作品における動物表象は、いずれもユダヤ民族の隠喩として理解することができる。これは『ある犬の研究』においても例外ではない。アルトは作中に頻出する「民族 (Volk)」、「共同体 (Gemeinschaft)」、「犬の民族 (Hundevolk)」といったキーワードに注目し、学者犬が思いを馳せる犬の祖先が同化政策以前のユダヤ民族を、また、学者犬と同じ時代に生きる今日の犬の民族が同化政策後のユダヤ民族を表すものだと読み解いている。そこでは作中の、犬の民族が祖先の罪のために犬族の根源から隔てられてしまった、という描写について、その罪がユダヤ人の同化政策の仄めかしであるということや、主人公が到達できない犬族の「規定の奥深い秘密」がタルムードを想起させることが指摘されている。Vgl. Alt, S. 653-658.

の特性を反映したものとなる。

彼ら〔七匹の音楽犬たち〕は会話せず、また歌わなかった。概して、ほとんどある種の頑なさをもって沈黙し、だが空っぽの空間から上方へと、魔法のように音楽を呼び出し奏でていた。すべてが音楽だった。彼らの脚の上げ下げ、頭の向きの方向転換、走ったり止まったりする動き。互いに形作る立ち位置、輪舞のように互いに連なった立ち位置。一匹が前脚をほかの犬の背中に乗せて支え、そしてほかの犬もすべて同じようにすることで、最初の一匹がほかの犬たちの重さを背負っていた。(N 428)

登場の場面でこそ音楽犬たちは、音楽を奏でる偉大な芸術家の姿を纏って現れる。しかし学者犬は、彼らを研究者さながら「よく観察 (bei genauer Betrachtung)」(N 430) し、統制のとれた動きをみせる彼らの表情に、怯えと不自然さを看取する。

彼らは平気ではなかった。むしろ極度の緊張をもって動いていた。一見安定して動いている彼らの脚は、絶え間なくびくびくと痙攣しながら一步ごとに震えていたし、絶望しているようにこわばった様子で互いに見つめ合っていた。(N 430)

彼らは、ひとたび善良な本能に従って前脚を下ろしたならば、それがまさに誤りであったかのように、その本性がまるで誤りであるかのように、愕然として再び素早く脚を上げた。その目はまるで、罪深い行為を少しの間中断しなければならなかったことに対して、赦しを請うているようであった。(N 432)

ここに学者犬は、偉大な芸術家にはおよそ似つかわしくない不安の痕跡を見出し、その動きが自律的なものではなく、何者かに統制されていると察知している。そうして「いったい何に対して不安を抱いているのだろうか。いったい何が彼らに、ここでおこなったようなことを強いたのだろうか」(N 431) と心の中で問うのである。

この場面で仄めかされているのは、音楽犬たちの背後に存在し彼らを司る審級、つまり人間の存在である。そう考えると、人間からの指示を受ける音楽犬たちが実はサーカスの曲芸犬であり、また彼らのみせた運動が曲芸のパフォーマンスであったことが明らかになる。

不可思議な現象の背後に不可視である人間の存在をうかがわせる描写はこの物語に多くみられるが、「猟師」と呼ばれる犬が登場する場面もその顕著な例といえる。学者犬は森の中で彼に出会うのだが、その際この猟師は、学者犬が彼の通り道をふさいでいると苦情を申し立てる。

猟師は獲物を追跡している途中だったのだ。このようなやりとりの中で、学者犬は猟師に、彼が自らも気がつかないうちに歌唱を始めていると指摘する。はじめ猟師と一体であるように思われたこの音楽は、次第に強度を増し、また猟師から分離して「もっぱら彼〔学者犬〕を目指して」(N 479) 追いたててくるように感じられるようになる。猟犬を獲物に向かって放ち、その後から呼び声をかけながら人間の狩人が次第に近づいてくる様子が目の前に浮かび上がってくるようである。⁹ ただし、学者犬はこのどちらの場合においても人間の存在を感知することができない。音楽犬たちの振る舞いの背後に他者からの強制を察知してはいるものの、学者犬にとっては彼らの同伴者である人間、曲芸師の存在が不可視だったのであり、それゆえ彼らの奇妙な振る舞いと音楽はより強烈な衝撃を与えるものとなった。そうして彼は、このような犬の世界の不可解さを解明しようと学問を開始するのである。

ここに動物種とその環世界という主題が浮かび上がってくるのだが、これまで先行研究においてもこの観点から学者犬の知覚能力がしばしば考察対象とされてきた。パウル・ヘラーは、カフカ研究においてカフカが実際に触れた著作や言説を特定することが、彼の「情報を偽装工作する戦略 (Desinformationsstrategie)」¹⁰ ゆえに非常に困難なものであるとしつつも、動物の知覚を主題に据え、当時の物理学、医学、精神医学や生物学上の発見を参照することで作品の起源を描き出そうと試みている。そして彼は、ヤーコブ・フォン・ユクスキュルの動物の環世界研究を重要視する。¹¹ そのうえで、各動物種が特定の刺激しか感知することができず、それにより種固有の世界像を構築しているという、ユクスキュルが主張した環世界の理論からの影響を『ある犬の研究』に見出している。¹² この物語において学者犬は自身の感覚器の性質ゆえに人間の存在をとらえることができないのであり、それが学者犬の研究が成就するのを阻んでいるのだ。¹³

⁹ この知覚と認識の問題に関して、この物語は学者犬の認識を読者が追体験する仕組みになっているという指摘がある。「カフカはこの物語を「わたし」の〈犬の知〉という特殊な認識はフィルターを通して語る／もしくは語らせることで、「認識すること」がどのように主観に左右されるかを、「わたし」とともに読者に疑似的に体験させることを意図して描いている」山尾涼『カフカの動物物語〈檻〉に囚われた生』水声社 2015年、170頁。

¹⁰ Heller, Paul: *Franz Kafka. Wissenschaft und Wissenschaftskritik*. Tübingen 1989, S.106.

¹¹ このような趣旨に基づき、ヘラーは学者犬における人間の不可視性を指摘している。「しかし彼の認識の地平のうちにはないものは、人間の世界と真実である」Ebd., S. 147.

¹² ヨッヘン・テーアマンは、ユクスキュルに言及すると同時に、それがカントの「空間のアプリオリ」に該当するとも言っており、動物学的観点に加えて哲学的な観点からも以下のような検討している。「カントが主張するところの、知覚主体と分離不可能な空間のアプリオリはユクスキュルによって生物学的に継承されている」Thermann, Jochen: *Kafkas Tiere*. Marburg 2010, S. 52.

¹³ 加えて、カフカの物語においては犬が人間との関係性において惨めな存在として描かれることが多い。『ジャッカルとアラビア人 (Schakale und Araber)』では、アラビア人たちによってジャッカルのことが「愚か者、彼らは真の愚か者なのです。[...] 彼らはわれわれの犬なのです (Narren, wahre Narren sind sie. [...] es sind unsere Hunde)」と形容されており、また『奇妙だ!』とその犬は言った「[...]」か

20世紀前半のヨーロッパにおいては、ユクスキュルの環世界研究以外にもさまざまな角度から生物学的な研究が活発におこなわれていた。今日最も有名なものの一つはイワン・パブロフがおこなった空腹時の犬の条件反射実験であろうが、その影響を受けほかにも同様の動物実験が数多く試みられていた。¹⁴ これらはいずれも動物の知覚能力を調査し、彼らがもつ、人間のものとは異なる世界像を知ろうとする試みであったといえる。このような自然科学分野の状況と並行し、文学においてもまた、当時は動物の世界観を描き出す物語が数多く生産された。¹⁵ その例としてここでは『ある犬の研究』と同時期に成立した作品を二つとりあげ、それらと比較することで『ある犬の研究』にみられる動物の世界像について考えたい。

ユダヤの出自をもちオーストリアに暮らしていたフェーリクス・ザルテンはカフカと非常に近い境遇にあった作家であるが、彼はカフカが『ある犬の研究』を書いたのとはほぼ同時期、1923年に『バンビ 森の生活の物語 (Bambi. Eine Lebensgeschichte aus dem Walde)』の中で動物たちの目から見た人間を描写している。作中では森の動物たちによって侵略者としての人間の恐ろしさが語られていくが、興味深いことに、ザルテンはその際に動物たちが「人間」という言葉を発するのを徹底して避け、代わりに「彼」や「それ」と呼ばせている。ここにはザルテンの、あくまで動物の目を通した世界像を描くことへのこだわりが見てとれる。この点においてこの物語は、徹底的に犬のまなざしを通した世界を提示する『ある犬の研究』に類似している。もっとも、ザルテンの場合は物語の語り手が全知 (auktorial) であり、この語り手には人間と動物を比較する視点が与えられている。この物語の結末部では一頭の年老いたノロジカが、人間を恐れるバンビに対して、人間が決して動物より上位の存在などではなく動物と同等のか弱い存在であると教えを説く。つまりここでは、人間の外部から人間を批判的にとらえるという動機に基づいて、動物の世界像が提示されているといえる。

二つ目はライナー・マリア・リルケの『ドゥイノ悲歌 (Duineser Elegien)』である。この作品の「第八の悲歌」は『ある犬の研究』の成立と同年1922年に書かれているが、ここでは動物が世界の「開かれ (das Offene)」¹⁶ を見ることのできる存在として、彼らとは異なり「裏返しに

ら始まる断片の「私はこの目的なく走り回ることが、この広大な荒涼とした空間が恐ろしい。そこでは私はなんと哀れで、救いのない、小さな、まったくもってこれ以上見出されえない犬であることだろう」(N 381ff.) という自己省察は、自由に憧れながらもそれを恐れ、自ら主従関係に依存する飼い犬の姿をさらけ出している。どちらの物語においても犬が人間に支配される境遇が描かれている。

¹⁴ その中でも犬に関するものの一例として、ラモン・トゥッロが1911年に、オイゲン・トーマは1915年に、それぞれ著作の中で犬の知覚実験について報告している。Vgl. Heller, S. 83.

¹⁵ 生物学研究的な観点以外にも、犬の表象の多様性について世紀転換期のヒューマニズムに関する議論の文脈から研究がなされている。川島隆「人間のような犬と、犬のような人間 — エーブナー=エッセンバッハからカフカまで —」: 『日本独文学会研究叢書』87号 (2012年) 39~54頁所収参照。

¹⁶ Rilke, Rainer Maria: *Duineser Elegien*. Leipzig 1923, S. 30.

なった (umgekehrt)」¹⁷ 目によってしか世界を見ることができない人間に対置されている。つまり、世界の中に含まれ世界と一体になることができる動物と、「解釈した世界 (d[ie] gedeutet[e] Welt)」¹⁸ (第一の悲歌) にしか触れることができない人間が比較されているのだ。¹⁹ 以上のように、世紀転換期の生物学において動物の知覚研究が活発であったのと同様に、動物の視点から人間を相対化する試みは文学においてもまた時代のモードであった。ザルテンとリルケの作品においては人間の特権的な地位を引き下ろすことに主眼が置かれるか (ザルテン)、もしくは動物の世界像の豊かさが描き出されるか (リルケ) の違いはあれ、ともに動物と人間が対置、比較されているといえる。それに対して、『ある犬の研究』では先述したように人間の存在が顕在化せずあくまで暗示されるのみにとどまるため、両者の比較が成立しえない。そこではむしろ、学者犬の知覚能力の限界性を提示することに重点が置かれ、それにより一個の主体が自身に固有の世界像と不可分であるという事実が読者に対して強調されている。そのため『ある犬の研究』は、環世界の限定性を強調したユクスキュルの研究と動物観を共有しているといえる。

ところで、ユクスキュルは自身が動物の知覚を研究する生物学者でありながら、1909年の著作『動物の環世界と内的世界』の中で観察という営為の限界性を指摘している。彼は、観察者が自らの主観を離れ、客観的な視点からほかの生物の「意識」を暴き出すことが「まったく不可能」であると認めているのだ。²⁰ しかも、この見解は生物学の領域のみに限定されたものではなく科学一般を念頭においてのことであった。つまりそこには学問批判的な志向性を読み取ることができるのである。この点でクラウス・ヴィールは「学問的な知が絶対的に客観的であること」を放棄すべきであると主張したユクスキュルの学問を一種の「メタ学問 (Metawissenschaft)」であると言いつけている。²¹ そしてこのメタ的な視点は『ある犬の研究』の学者犬がおこなう、犬族についての研究を特徴づける要素となっている。つまり、『ある犬の研究』という物語は、二つの意味でユクスキュルの思想に親和性があるといえる。一つ目は種固有の知覚という問題、もう一つは主観と学問行為へのメタ的なまなざしである。後者については第三章で論じる。

以上のように、この物語では、語り手である学者犬が描き出す世界が、感覚器によって制限を受けている。次章では、この世界観の制約という問題について、物語が語られる状況に注目しながら考察する。

¹⁷ Ebd., S. 30.

¹⁸ Ebd., S. 7.

¹⁹ ライナー・マリア・リルケ『新訳リルケ詩集』(富岡近雄 訳) 郁文堂 2003年、421頁以下参照。

²⁰ Uexküll, Jakob Johann von: *Umwelt und Innenwelt der Tiere*. Hrsg. v. Florian Mildenberger und Bernd Hermann. Berlin / Heidelberg 2014, S. 233.

²¹ Wiehl, Klaus: Die Poetologie der Biologie. Franz Kafkas „Forschungen eines Hundes“ und Jakob von Uexkülls Umweltforschung. In: Neumeier, Harald / Steffens, Wilko (Hrsg.): *Forschungen der Deutschen Kafka-Gesellschaft. Band 4: Kafkas Tiere*. Würzburg 2015, S. 205-225, hier S. 207.

2. 語りの状況と語られる内容 — E. T. A. ホフマンの『犬のベルガンツァの最近の運命に関する報告』との比較

本章では『ある犬の研究』を E.T.A.ホフマンの『犬のベルガンツァの最近の運命に関する報告』と比較し、語りのおこなわれる状況と物語の内容の関係性を明らかにする。このホフマン作品の語り手は人間の作家「私」である。物語中ではこの「私」を聞き手として、犬のベルガンツァから自身の人生譚が繰り広げられる。

カフカ作品に影響を与えた先行作品の突き止めが困難なことはすでに述べたが、『ある犬の研究』においては、それが E.T.A.ホフマンの『犬のベルガンツァの最近の運命に関する報告』から多くの特徴を継承していることを読み取ることができる。²² まず犬が過去を回想し、語る自伝という物語の枠組み自体が共通しているが、そのほかにも食欲、音楽、かつて本能のまま無邪気に暮らしていたころについての幸福な記憶、そして恐怖体験といったモチーフは両方の物語にみられる。

また、両物語の登場人物を比較すると、『犬のベルガンツァの最近の運命に関する報告』に登場する7人の魔女、音楽家、哲学の教授が『ある犬の研究』における7匹の音楽犬、哲学的なおしゃべりに終始する空気犬と符合することがわかる。加えて、どちらの物語においても自伝を語る犬が、犬という種がほかの生物に対して優越する存在であるという認識をもっている。さらには『犬のベルガンツァの最近の運命に関する報告』にみられる「君〔自伝の語り手である犬のベルガンツァ〕と君の種族〔犬という種〕についての反省 (Reflexion über dich und dein Geschlecht)」(B 109) という表現は『ある犬の研究』の内容全体と符合する。なお、カフカの物語の中にはホフマン作品から影響を受けていると思われるものがほかにも複数存在する。一例をあげるなら『ある戦いの記録 (Beschreibung eines Kampfes)』(カフカ)には『大晦日の冒険 (Die Abenteuer der Silvesternacht)』(ホフマン)の、また『アカデミーへの報告』(カフカ)には『ある教養ある若者についての報告 (Nachricht von einem gebildeten jungen Mann)』(ホフマン)の影響がみられる。いずれも物語構造やモチーフの着想を得ている。ところで、興味深いことに現在残されているカフカの日記やメモ類の中にはホフマンについての言及が見受けられない。マンやドストエフスキーなどの作家については書き残しているカフカが、ホフマンについては頑なに沈黙しているのだ。これは、彼がホフマンの作品を強く意識していたことの逆説的な証左といえるだろう。

このように、ホフマンの作品から多くの特徴を受け継ぐ『ある犬の研究』であるが、しかし

²² 『ある犬の研究』はホフマン作品以外にも以下の物語との類似が指摘されている。オスカル・パニツァ『犬の日記から (Aus dem Tagebuch eines Hundes)』、モーリス・メーテルリンク『ある若い犬の死について (Vom Tod eines kleinen Hundes)』、トーマス・マン『主人と犬 (Herr und Hund)』など。Vgl. Heller, S. 142, 146.

そこには大きく異なる点もまた存在する。多くの要素を受け継ぎながらあえて変更された特徴はカフカによって必然性をもって生み出されたものだといえ、これについて考察することはこの物語の核心をとらえるために有効である。主な相違点としては、ホフマンの作品においては物語の語り手が自伝を語る犬ではなく人間の聞き手「私」である点や、『ある犬の研究』においては物語中に犬しか登場しないのに対し、ホフマンの作品では物語が語り手ベルガンツァと人間の間のエピソードで構成されている点などがあげられる。ただし、両作品の最も大きな違いは語りがおこなわれる状況である。『犬のベルガンツァの最近の運命に関する報告』ではベルガンツァによる語り聞き手との対話形式であるがゆえに、語り手の意図が聞き手に理解されないというなり行きや、聞き手から逐次挟まれる質問や感嘆などによって語りが強制的に中断されてしまうといった事態が発生しており、それが「破滅 (Katastrophe)」の物語を語り聞かせるという語り手の趣旨にそぐわない独特のおかしさを生み出している。²³ そしてこの外部からの語りの中断は、語り手ベルガンツァの思考に対するものであると同時に、読者が直面するものでもある。この物語は、物語を追う読者もまたベルガンツァ同様に、この思考し語るという主体的行為が他者により阻害される不自由さを迫体験する仕組みになっているのである。これに対して、『ある犬の研究』でおこなわれる語りは読者の前に顕在化しない聞き手にむかって行われるものであり、何者にも阻害されない学者犬の語りは独り言のようできえある。つまり、この物語においては学者犬の知覚、認識内容が、語られる内容と同一化した構造になっているのである。

それゆえ読者はこの物語において、人間が不可視である知覚の世界、そして学者犬の思考の特徴である、結論を常に留保し、価値を吊り上げたままにしておく語りが生み出す不安定な認識を体験する。

3. 認識の複数性

3. 1. 結論の留保と認識審級の二重性

学者犬は彼の研究生活の中で「音楽犬」、「空気犬」、「猟師」という異なる職業に従事する犬たちとの出会いを通して、犬族の「音楽」、「民族」、「掟」、「忘却」、「沈黙」といった概念について考察する。しかしこれらの研究はいずれも成果をあげるに至らない。その原因の一端が彼の知覚能力にあることはすでに述べた。感覚器官に根差した自然な水準で観察をおこなって

²³ それはたとえば、語りを先へ進めようとするベルガンツァに対して、聞き手である「私」からそれを遮って挿まれる「ああよかった。君は助かったのか (Gott sei Dank, du bist erlöst)」(B 109)のような合の手や、それに返される「ああ、いいから聞きたまえ! (O höre nur weiter!)」(B 109)、「今中断するのはよしてくれ、わが友よ! (Jetzt keine Unterbrechung, mein Freund!)」(B 112)という応酬であり、また頻繁に語りの本筋から脱線する対話相手への「いいから続けたまえ (Doch weiter)」(B 110, 158)、「さあ、続きを話して (So erzähle weiter)」(B 111)といった「私」からの催促である。

る学者犬であるが、興味深いことに彼は、思考のレベルにおいてはそのような自らの限界に対して極めて自覚的な認識を獲得している。物語中では彼のこのメタ的な視座が繰り返し強調される。

私は真の学問に対して、それにふさわしく、最大限の畏敬の念を抱いている。しかし真の学問をさらに前進させていくには、私には知識と勤勉さ、そして安心が欠けている。(N 437)

学者としてみたときに、[...] 私は、最も簡単な学問の試験さえひどい成績で合格するだろう。その理由は、もちろん [...] まずは私の学問的な無能力さや低い思考力、記憶力の悪さにあり、そして何よりも、学問的な目標を常に眼前にしっかりと保持しておけないということがある。(N 481)

一個の主観でありつつ、同時に自身の主観的観察の明証性を括弧に入れる、対象から距離を取ったこの思考方法は学者犬の省察全般の特徴といえる。

学者犬は、彼が「まだ犬社会のただ中に暮らしていた」(N 423) ころ、学問を開始する以前からすでに「小さな破れ目」(N 423) をそこに見出だしていた。自身も犬でありながら犬族の社会について違和感を抱き、考察するという態度自体が「自然的・客観的」な価値観の吊り上げによって可能になるものであり、素朴実在論的なレベルよりも高い次元からの省察であるといえるが、それは自分で発言した内容をすぐその後で否定するという、その語り方にも表れている。物語の始めにおける「いかに私の人生が変化したことか、そしてその実、根本においてはいかに変化していないことか! (Wie sich mein Leben verändert hat und wie sich doch nicht verändert hat im Grunde!)」(N 423) という語り方にそれはすでに表れており、ほかにも「われわれは皆文字どおり一つの群れに生きているといえる (Man darf doch wohl sagen, daß wir alle förmlich in einem einzigen Haufen leben)」(N 425) といった後の「どのような生物も、私の知識によればわれわれ犬のように広範囲で散り散りに生きてはいない (Kein Geschöpf lebt meines Wissens so weithin zerstreut wie wir Hunde)」(N 425) という打消しや、「私は本当に私の研究に関してそれほど孤独だったのか、昔からそして今も。そうであるし、そうではない (War ich wirklich so allein mit meinen Forschungen, jetzt und seit jeher? Ja und nein)」(N 445) といった箇所など随所にみられる。加えて、学者犬はこのように価値の無効化をおこなう自らの存在でさえ決して特別視しておらず「本質的には、まさにほかの犬たちと同じような犬だ (Im Wesentlichen genau so wie die andern)」(N 443) と認めている。

このような思考のかたちはフッサールの現象学によると、超越論的なものであるといえる。²⁴ フッサールの定義に従い、本論文では超越論的を、素朴実在論的な「客観」の明証性を一度無効化し、世界に対する意味づけの段階自体に意識を向け、そのうえで、主観性を中心に据えた認識のレベルに立ち返ることとする。それは吟味した主観的思考を徹底化することによって逆説的に普遍への接近を目指すことを意味する。たしかに、本能や感覚器によって制限された像に依拠しておこなわれる学者犬の研究は素朴な観察の域を出ないといえる。しかし他方で、語り方や省察にみられるその態度は超越論的なものである。学者犬は安易に一つの結論にたどり着くことがなく自分の出した結論からでさえ常に距離を取る。

つまり、学者犬の認識においては、素朴な自然的知覚に根差す世界観とそれについてのメタレベルの思考態度が並存している。はじめに触れたように、これまで多くの先行研究は学者犬の知覚能力が彼の学問が挫折する原因だとしてきた。アルトは学者犬が「人間のものに類似した理性 (*menschenähnliche Vernunftfähigkeiten*)」²⁵ をもっていることに着目してはいるのだが、結局のところ「その学問方法に誤りがあるためではなく、彼の研究が、選択的な知覚のうえに成り立つ環世界においておこなわれるため」²⁶ 失敗すると結論している。しかしながら、この並存、つまり認識審級の複数性こそが統一された世界像の把持を妨げていることを看取するならば、それが世界に対する安定した認識の獲得を妨げていることが明らかになるのである。ただし、この知覚と思考の間に発生している認識レベルの断裂と並存は、一つの主観を構成する一般的な要素であり、このような並存をだれもが多かれ少なかれ生きているともいえる。そのような、さまざまな認識のレベルの統合体として一個の主観は構成されている。そして、世界に対する認識とはそれ自体がそもそも複数的な「意味の領野」として構成されている。マルクス・ガブリエルの認識論によると、意味を認識するという行為はある特定の意味の領野において発生する意味を認識するということであり、すべての意味の領野の根本原理となるような唯一の絶対的な領野は存在しない。ガブリエルは、「意味の領野の存在論はつまり存在論的な動機を承諾し、そして実存を真の性質としてではなく、そこにおいて何かが現前する、意味の領野の性質として再構成する」²⁷ と述べる。ある対象が存在するというのを、それが認識されるということと定義するならば、存在とはいかようにか意味をもちうるという属性であるとい

²⁴ 『デカルト的省察 (*Cartesianische Meditationen*)』の中でフッサールは、この超越論的な認識への第一段階である「現象学的な判断停止 (エポケー)」について以下のように説明している。「このあらかじめ与えられている客観的な世界についてのすべての態度表明を全般的に無効化すること (「禁止すること」、「賭けないこと」)、[...] もしくはこの客観的な世界の「括弧入れ」— はつまりわれわれを無に直面させるわけではない」。Husserl, Edmund: *Cartesianische Meditationen*. Hamburg 1995, S. 22.

²⁵ Alt, S. 656.

²⁶ Alt, S. 656f.

²⁷ Gabriel, Markus: *Der Neue Realismus*. In: Ders. (Hrsg.): *Der Neue Realismus*. Berlin 2014, S. 171-199, hier S. 196.

える。この物語では、学者犬という二重の意味領野をもつ観察主体を通してそれが表現されている。ところで、学者犬は真理への到達不可能性という問題に関して、犬族という種の学問能力という角度からも考察している。それによると、食料を対象とする学問は

途方もない規模をもっているため、個々の学者の把握力を超え出ているばかりか、すべての学識者のそれを上回ったものであり、犬族全員でなければ背負うことができない。また犬族全員をもってしても、せいぜいうめき声をあげながら不十分なかたちで引き受けうるものなのだ。この学問は、長い間蓄積されてきた古い成果の中で何度もぼろぼろと剥がれ落ちていくため、苦勞してそれを補ってやらなければならない (N 436f.)

同様の分析はまた、空気犬について回想する場面にもみられる。学者犬は、空気犬らがみのりをもたらす大地と分断された存在であるにも拘わらず繁殖に成功しており、その後継世代が常に現れるということに疑問を抱く。犬族にとって大地とのつながりは不可欠なもののはずである。学者犬は、空気犬らがこの掟に違反していながらもなお繁栄していく、その仕組みが解明不可能である理由を「われわれ〔犬族〕の悟性では太刀打ちできない障害によるものかもしれない」(N 450) と告白している。

このように彼は、自身の思考能力の限界を認め、また共同体内部の共通認識の有効性を停止し、犬という種の認識能力の限界をも打ち明けている。ここでは、自然な知覚と高次の認識という二つの審級をもつがゆえに学問的な思考をおこなうことができるが、皮肉にもそれゆえに絶対的な真理へと学問を完遂することを放棄せざるを得ないという認識行為のジレンマが暴き出されている。そもそも、カフカの文学においては到達し得る客観的な「真理」というもの自体が退けられているのである。たとえば、断片『ある若い功名心の強い学生 (Ein junger ehrgeiziger Student)』は『ある犬の研究』と動物、学問というキーワードを共有しているが、そこで語り手である学生「私」は研究において「普遍的な進歩に決して達することがないということ (daß es zu einem allgemeinen Fortschritt niemals kommen werde)」²⁸ を仄めかしている。つまりここでは、学問の真理への接続性のみにとどまらず、近づき得る対象としての普遍的な真理が存在することそのものが懷疑されている。

3. 2. 学者犬の学問

では、そもそもこのような学者犬の研究は学問と呼び得るのだろうか。その思考においては

²⁸ Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*. Hrsg. v. Malcom Pasley. Frankfurt am Main 1993, S. 227.

積み重ねた思考過程が結論に対して閉ざされており、「客観的眞実としての知」に到達すること自体が放棄されている。しかし、そのような「自明」な知に対して距離を取り問いただすことこそが、カントによれば学問の発展に必要な不可欠な態度であった。

カントは『諸学部争い (Der Streit der Fakultäten)』の中で、政府が定めた上級学部、下級学部という区分は、前者が政府と直接に結びつく教説を司り、後者は学問の発展にのみ関心をもつことに由来していると述べている。神学部、法学部、医学部の上級三学部の教説は公の知であり、実務家を通して大衆の生活に直接関わる。そして大衆はできるだけ少ない労力で幸福を得ることを望むため、これらの教説は墮落する危険性をもっている。それに対して哲学部は公の知を含むあらゆる教説を「学問の利益を目的とした吟味と批判の対象 (zum Gegenstande ihrer Prüfung und Kritik in Absicht auf den Vorteil der Wissenschaft)」²⁹ とするのである。

ところで、この「公」に関してロバートソンは『ある犬の研究』の音楽犬や猟師、空気犬らがいずれも人間に奉仕する存在であり、公の領域に属するのだと指摘しているが、³⁰ これはカントのおこなう上級学部についての定義を想起させる。国家や教会に奉仕する上級三学部には、自身が司る教説がどのようなものであるかについて根本的な問いを立てることは禁じられていた。なぜならそれはその学部の存在意義そのものを疑問に付すことを意味するからである。そしてこの上級学部の特徴は、学者犬の投げかけた、なぜそのような行動を取るのか、という問いに対しての音楽犬と猟師の反応を的確に表している。それは、沈黙する、あるいはただ「それについてはまた、理解することなど何もない。それらは自明で自然なことなのだ。(es ist daran aber auch nichts zu verstehen, es sind selbstverständliche natürliche Dinge)」(N 478) と答えるというものであった。根本への問いは犬たちにおいてもまた禁じられているのである。それはなぜなら、先に述べたように上級学部が実務家を通じた知の実行を重んじるのと同様、犬族にあっても一般的には実用的、実利的な知が重要視されるからである。学者犬が、食料に関する知を得ようとほかの犬たちの前で問いを立てるとき、彼らにとっては、食料という事柄について理論的に知識を深めるという思考自体が理解しがたいものだという事実が明らかになる。

[...] けれども私の問いは「大地はどこからこの食べ物を得ているのか？」というものである。この質問について、概してひとは理解できないと言うか、せいぜいのところ「君に食べる物が十分ないなら、私たちの分をあげるよ」と答えるのであった。この答えに気をつけてほしい。一度手に入れた食べ物を分け与えるということは犬の長所には含まれない。そう私は記憶している。生活は困難で、大地は扱いにくいのだ。学問は知識に富んではい

²⁹ Kant, Immanuel: *Der Streit der Fakultäten*. Hamburg 2005, S. 28.

³⁰ Vgl. Robertson, Ritchie: *Kafka. Judaism, Politics, and Literature*. New York 1985, S. 277.

るが、実用的な成果にはあまりに乏しい。(N 438)

もつとも、学者犬によると、ここではほかの犬たちがおこなっている申し出、食べ物の分配は真に受けるべきものではなく、さらなる質問を封じるために学者犬に向けられた皮肉にすぎない。ほかの犬たちにとって関心の対象はあくまで、どのようにすれば効率的に食料を得ることができるか、というものであった。そのため彼らにとっては、食料という対象について知を深めるべくその起源について問いを提出してくる学者犬の行動は煩わしいものでしかなかったのである。対照的に学者犬はひたすら彼らの振る舞いや犬族の掟について問いを投げかけ、自らの解釈を吠え示す。それこそがカントが哲学部に「すべての意見を公衆に向かって声高に主張する、無制限の自由」³¹ として認めたことであった。

このような学者犬の学問は一見、カントが哲学部と上級学部の争いにおいて「学者共同体と市民共同体の格率における一致 (Eintracht des gelehrten und bürgerlichen gemeinen Wesens in Maximen)」³² という人類全体としての発展を念頭としていたことに比べて、³³ 孤立した私的なものであるように見える。しかし、学者犬の学問においても犬族の共同体としての合一は理想的なものとして掲げられており、それは物語中に「暖かな集まり (das warme Beisammensein)」(N 425) や、「私は、もし民族同胞と意見が一致すれば幸せである (ich bin glücklich, wenn ich mit den Volksgenossen übereinstimmen kann)」(N 438) などの表現で表れている。その脱社会的な振る舞いにおいてもそこでは一つの民族としての共同が切望されているのであり、それはいわば最終的には再び合流されることが目指された孤立だったのである。そもそも『ある犬の研究』においては、本能的な欲求を抑制し曲芸に取り組む音楽犬たちであっても、ある意味では仲間内の楽しみに興じている閉じた集団にすぎないということの可能性が暗示されている。

けれども彼らは友人同士、つまり親密な間柄の7匹で集まっていただけであった。それはいわば、自ら立てた4枚の壁に囲まれていたのであって、いわば全くの内輪の状態だったのだ。なぜなら友人同士の集まりは公共性をもたないのであり […]。(N 434)

この物語では、規則を遵守し調和を尊重することから、一見公共性を重視しているように見える集団が、その実私的な集まりにすぎない、という状況への疑義が呈されているといえるかも

³¹ Kant 2005, S. 35.

³² Ebd., S. 37.

³³ またカントはその歴史哲学において、人類は個人としてではなく、種として徐々に発展していくのであるとも述べている。Vgl. Kant, Immanuel: Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht. In: *Schriften zur Anthropologie Geschichtsphilosophie Politik und Pädagogik*. Hrsg. v. Wilhelm Weischedel. Bd. 6. Darmstadt 1998, S. 35.

しれない。

4. 結論

これまで述べてきたように、『ある犬の研究』では主人公の学者犬によって物語が語られる様子が特徴的である。その先行作品である E.T.A.ホフマンの『犬のベルガンツァの最近の運命に関する報告』において、人間を聞き手とした対話状況の中でおこなわれた回想の語りは、この物語では孤独に内省的になされるものであった。

カフカは 1922 年 7 月の手紙で友人オスカー・バウムに、約束していた彼の元への訪問を目前に控えて、自身がプラナの部屋を離れることを恐れていると書き送っている。そこに記されている、「非常に素晴らしい、人目をひかないということは非常に素晴らしい (so schön, so schön ist es, unbeachtet zu sein)」³⁴ という言葉からは、カフカが自分を監視、支配するまなざしを恐れていたことがうかがえる。これはカフカの晩年の動物物語『ある犬の研究』、『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』の両方が動物の登場人物のみで構成されていたことと関係していると思われる。そこで描かれていたのは、監視者としての飼い主、つまり人間が不在の世界であった。主体の自由を脅かす監視を恐れるというこの警戒心は、しかし一般的なものであるともいえる。この監視は先に触れたカフカのほかの動物物語において、あるときは檻の中の猿を監視する人間たちのまなざしとして、またあるときは「私」の暮らす巣穴を見張っているかもしれない敵のまなざしとして描かれている。

動物の世界と人間の世界を比較し描き出す手法が流行していた 20 世紀前半において、『ある犬の研究』はしかし、語りが犬の視点によるものであるという構造にこだわり抜かれて書かれている。この構造は当時のカフカの状態にも起因しているといえる。先の手紙のエピソードをふまえて考えると、晩年のカフカにとっては、対象を上位からまなざして比較するという観察方法に基づく物語は選択不可能なものとなっていたということが推察できる。ゆえに『ある犬の研究』においては、これまで思索を重ねてきた一匹の犬の視点に同化した語りを採用さ

³⁴ カフカは、この手紙に先立って 6 月終わりごろに、オスカー・バウム宛に自身がバウムの滞在するゲオルゲンタールに 7 月 20 日に発つことを決めた旨を書き送っている。この手紙でカフカは、仮にバウムが彼の滞在先を手配することができなかったとしても、「年金生活者となった官吏には、世界は開けている (einem pensionierten Beamten steht ja die Welt offen)」ので、滞在先を見つけることは容易であり、心配無用だと伝えている。ここでのこの上機嫌な様子自体が身体的、経済的な不安の裏返しともとれるが、それでもこの手紙からは、少なくともこの時点ではカフカが訪問の意志を固めていたことがうかがわれる。しかし、続く 7 月 4 日の手紙では予定していた旅行の日取りを一旦取り消し、到着予定日については後に連絡するとしている。加えてこの手紙には先の手紙にみられたような陽気さはなく、代わりに旅行という「変化 (Veränderung)」によって「神々の注意を自分にひきつけてしまうことへの不安 (die Angst, die Götter auf mich aufmerksam zu machen)」が告白されている。そして結果的にこの旅行は実行されなかった。An Oskar Baum. (Ende 7.1922) In: *Gesammelte Werke*. Hrsg. v. Max Brod. Frankfurt am Main 1966, S. 381-382, hier S. 382.

れていたのである。そして語りが内的省察と重なり合う物語世界においては、自然的な知覚能力と超越論的な思考の並存が生み出す不安定な認識の世界が描かれている。学者犬の学問はこのような不安定な認識基盤を前提としてはじめておこない得るものだったのであり、その意味において彼の認識能力はその研究方法に直結している。それは単一的で統一的な世界観を括弧入れし、民族の掟に問いを投げかける学問であった。

しかし、同時にこの結論を退け続ける学問においては客観的な真理への到達は必然的に閉ざされている。物語の最後に学者犬が手に入れたと語る自由とは、法を疑い、起源について問いを立てることによってその支配から逃れる自由ではあっても、彼に民族共通の安らぎへの道を拓くものではなかったのである。

Pluralische Erkenntnisstufen in der Erzählung des Forscherhundes – Franz Kafka *Forschungen eines Hundes* –

YAMASHITA Daisuke

Die Franz Kafkas Erzählung *Forschungen eines Hundes* entstand im Juli 1922. Der Protagonist und zugleich der Erzähler dieser Erzählung ist ein Hund „ich“. Diese Erzählung ist eine Selbstbiographie, in der der Forscherhund über sein bisheriges Leben und seine Forschung erzählt. Er ist ein Forscherhund, der sich mit der eigenartigen Forschung nach dem „Hundevolk“, von dem er selber ein Teil ist, beschäftigt. In dieser Erzählung erzählt er über Hunde wie „Musikhunde“, „Lufthunde“, „Jäger (Jagdhund)“ und gleichzeitig betrachtet er Hundevolks „Gesetz“, „Vergessenheit“, „Schweigen“ und „Ernährung“.

Die meisten bisherigen Forschungen stellen mit dieser Erzählung eine gemeinsame Interpretation dar. Laut dieser Interpretation wird der Betrug des Erkennens in dieser Erzählung mit der Gestalt des scheiternden Hundes beschrieben. Zwar sieht man in der Erzählung, dass die Erkenntnisfähigkeit des Forscherhundes begrenzt ist, und diese Eigentümlichkeit spielt gewiss eine große Rolle. Jedoch brachte Kafka in *Forschungen eines Hundes* eine Welt hervor, die sich nur mit der Perspektive von einem Hund strukturiert. Diesen Versuch liest man bei den Anderen Hundegeschichten von Kafka nicht ab. Was bedeutet dann diese Umwelt, die nur mit Hunden entsteht? Um diese Problematik zu klären, muss man die Erkenntnis des Forscherhundes, die diese Umwelt erzeugt, in Betracht ziehen. Diese Arbeit richtet sich auf diese Problematik. Die zwei Aspekte dafür sind die begrenzte Wahrnehmungsfähigkeit des Forscherhundes und seine Erkenntnis über die Begrenztheit.